2021年度岐阜県演劇大会　一日目　３校目　　≪講評文≫

大垣桜高校『paradigm shift』

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽

大垣桜高校さんは「ファッション賞」です。

なにより、この劇を通してもっとも印象強かったものがドレスでした。三者三様のデザインでありながら、三人が横並びになった時の統一感は鮮やかで、客席からは見えないであろう細部まで作り込まれて、大垣桜高校演劇部のプライドが感じられました。ドレスだけで一つの作品に十分なり得る大変煌(きら)びやかなものでした。

この作品は大垣桜高校の彼女たちの感じるリアルが詰め込まれていたと思います。

コロナ禍で部活動が制限され発表会も大会も中止になり、日々の生活さえもこの厄災に縛られているリアル。それに加えて、大垣桜高校ならではの葛藤と憤りというリアルがこの作品にはあったと思います。それを感じたのがコンビニで他校生と遭遇する場面。環境の違う彼女たちを見て、他校生らは嫌味や偏見の言葉をこぼします。それを受けての「何も知らないのに…」という《桜良》のセリフには、自分たちのことをろくに知りもしない人にとやかく言われることへの怒りが滲み出ていました。環境は違えども、彼女たちにも悩みや苦労、楽しみや達成感があって、それはまた彼女たちにしか感じることのできない経験なんだと思います。多様性を尊重する風潮がある中で、憶測を過信せず認識を改めていくことを、彼女たちは望んでいるのではないかと感じました。

また、《桜良》と《蘭》たちとの間で衝突が起きるシーン。各々に考えることや目標があって、実現に向かって努力するも思い通りにいかなかったり、人と対立をしてしまったり。より良いものを作ろうとしている彼女たちにとって、心の内を明かして相手とも自分とも向き合うことが必要だったと思います。ただこの衝突は、本当に仲間のことを信じているからこそ起きてしまうのであって、それを乗り越えた彼女たちは心も絆も強くなったのだと思いました。

偏見で物事や人を判断するのもいけないけれど、自分の本音を言わないでは、本当に理解し合うことはできない。聞き心地のよいフェイクや偏見を跳ね返してしっかりとした関係を作っていくことの大切さを感じました。

大垣桜高校さんお疲れ様でした！

◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽ ☆ ◎ □ △ ○ ▽